インフラがつくった町の空気

空から見る名駅エリア〔資料：名古屋市都市計画情報サービス〕

都市のインフラには、町の空気を生み出す働きがあります。とくに運河や鉄道は、都市の骨格をかたちづくるだけでなく、人々の居住や企業活動の分布を大きく変えることもあります。しかし、インフラの種類が異なると、都市に与える影響も違ってきます。

鉄道の場合、乗り降りできる場所が駅に限られます。線路そのものが都市づくりに積極的な働きをすることは少なく、むしろ、線路の存在が町を分断するバリアになることもあります。その一方で、名古屋駅のようなターミナル駅は、モビリティの結節点となり、周りに高度な商業機能の集積をもたらしました。名駅の高層ビル群が落とす陰は、増大する交通エネルギーを象徴するかのようです。

中川運河は、沿岸のいたるところで荷の積降しが可能な「細長い港」として、両岸の産業用地と一体でデザインされました。その大きな特徴は、両端に位置する笹島の堀留と名港のふ頭、つまり鉄道でいう駅と駅を結ぶだけでなく、軸線全体にわたって人間の活動を導き、支えてきたことにあります。中川運河を流れるインダストリアルな空気の根本には、都市をつくる逞しいインフラの働きがあるのです。

絵で見て考える中川運河の「らしさ」

都市の「らしさ」は、直感的にはわかっても、言葉にしにくいものです。視界に収まらないスケールの大きな特徴、目前にあっても気づきにくいリズム、意識化されていない付き合いの作法など。

そうした言語化しにくい町の底流をつくる脈を可視化するために、『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』と題する本シリーズを制作しました。

絵からヒントを得ながら、未来の都市づくりのために想像力を働かせましょう。

『空間コードから共創する中川運河』
鹿島出版会（2016年）
ISBN：978-4306073203、2,500円+税

中川運河の空間コード

- A1　海に向かう都市の層（2018/12既刊）
- A2　閘門式運河の水面（2018/03既刊）
- A3　人工の自然堤防
- A4　緑のコリドー
- B1　運河を挟んで向き合う（2019/08既刊）
- B2　インダストリアル空間（2020/02既刊）
- B3　鳥と風が運ぶ都市の緑
- B4　連続体の美学
- C1　名古屋の大静脈
- C2　インタラクトする水土
- C3　「自然」とのつきあい
- C4　創造力の空間

『絵で見て考える中川運河の「らしさ」』B2、2020年2月　制作・頒布：都市コミュニケーション研究所（riuc.takenaka-lab.net）
代表：竹中克行（愛知県立大学教授）、イラストレーション：クレメンス・メッツラー、解説：竹中克行、内山志保

2020年2月発行

絵で見て考える中川運河の「らしさ」

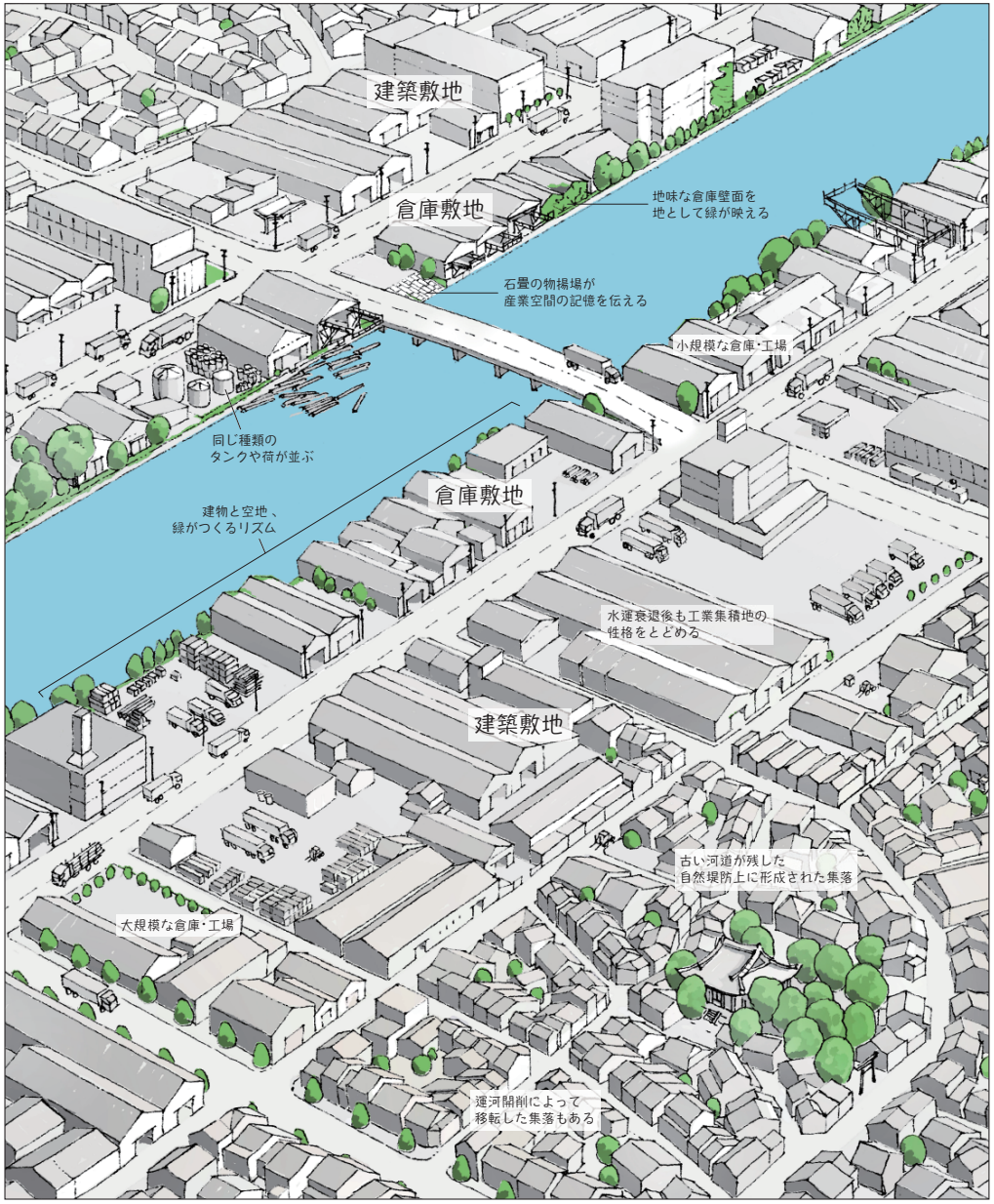
中川運河の空間コード B2

インダストリアル空間

住き合う水縁と工作物

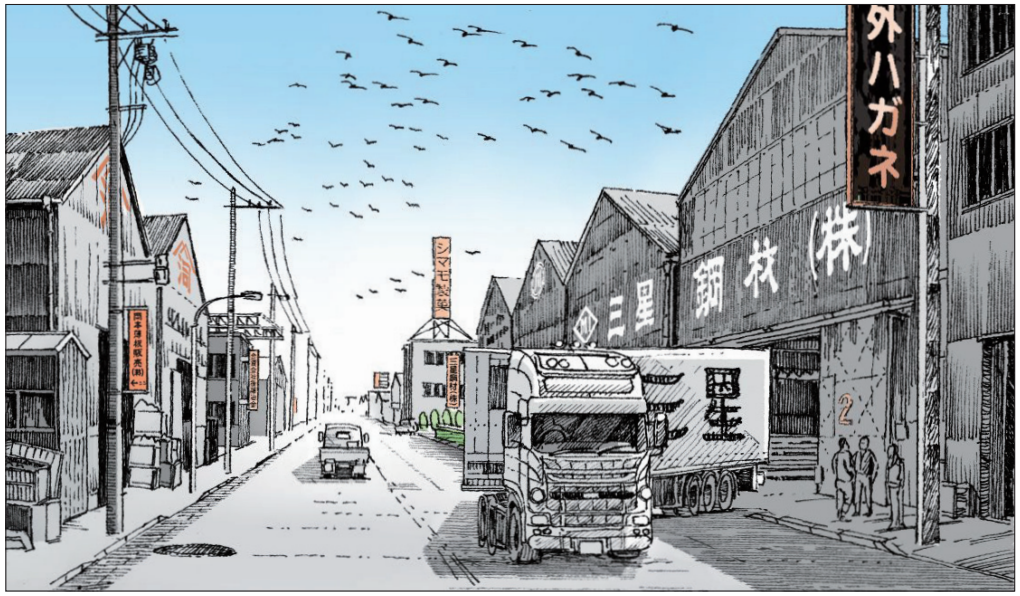
中川運河エリアに足を踏み入れた人がまず感じるのは、「インダストリアル」な空気ではないでしょうか。それを醸し出すのは、コストと機能性を重視した簡素な素材、それにグレー系の地味な色彩を特徴とする建造物のテクスチュアです。木材、トタンの波板、コンクリートの壁面に加えて、扉には厚くペイントした鉄板が多用されています。そして、同型反復される物流関係の什器や車輛、屋外に積まれた荷が、日々変化する風景のリズムを体現します。このように、中川運河の人工環境はいたって地味なものですが、それゆえ、両岸の緑の瑞々しさが映えるのです。ふつうなら自然環境は「地」、人工物は「図」となるところが、中川運河では両者の関係が逆転し、倉庫の壁面はときに大きなキャンバスに変身します。

空から見るインダストリアル空間



想像力を働かせて視点を空に置くと、中川運河の空間構成が一つのまとまった絵として浮かび上がります。中心軸をなすのは水路で、その両側に整備された倉庫敷地には、やがて小ぶりの倉庫や工場が建てられました。水路と並行する都市計画道路を挟んださらに外側では、運河開削時の土地区画整理により建築敷地が分譲されました。こちらは、区画にゆとりがあり、より大規模な事業所の立地に適していました。水路と陸路に2種類の規格の異なる敷地を組み合わせた「水・地複合帯」が中川運河なのです。そうしたインダストリアル空間に流れる独特のリズムを、古い社寺が立つ周辺の集落と比較してみましょう。

移動する人から見たインダストリアル空間



中川運河エリアの中に再び身を置き、船と車で移動してみましょう。昔の艀に乗った気分で船の甲板に出ると、視線が自然と両岸の風景へ向かい、両目を使った身体感覚で移ろいゆく運河の姿がとらえられるでしょう。倉庫の壁面に直接ペイントされた企業名やロゴは、ゆっくり移動する船上の人には強くアピールします。運河に並行する道を車で行くときはどうでしょうか。スピードが増すにつれて、運転席や助手席にいる人の視線は道路の先の方へと移り、透視図法の空間感覚へと収斂するにちがいありません。そうした対照的な空間経験も、水域と陸域が複合する中川運河のユニークさの一つです。